

「対話会イン八戸‘09」シニアのアンケート結果と感想

2010/3/10

SNW世話役伊藤 睦

2010年2月17日八戸工大で開催された、シニアと学生の対話会の事後シニアの参加メンバーから頂いたアンケートの結果とその分析を含めて会の感想を纏めた。

アンケートの結果と分析

アンケート回答者14名（出席者15名の内伊藤を除く14名）

（1）対話の内容は満足のもの了吗？

11名が「有る程度満足」の答えであったが「やや不満」が2名いた。

「不満」の理由は、学生側にこの会が対話の会であることが徹底されておらず、シニアの話を聞く会になっている事である。また「ほぼ満足」の理由としては、学生の真面目な参加態度と対話会の運営が良かったとしながら、学生の積極的な発言が少なかった事が挙げられている。

（2）学生は熱意を持って対話に参加していましたか？

とても熱心2、ある程度8名と大半は熱心に参加していたと評価しているが、「あまり熱心でない」と「どちらでもない」と否定的な人も3名いる。その理由として対話のグループにもよる（特にMG1）が、学生の発言が少ない事で、本当に熱心に参加しているかどうか判断に苦しむと云う理由が大半である。

（3）対話会場の雰囲気は如何でしたか。といに対しては、「とても良い」が6人、「良い」が8名と全員がよかったという評価であった。これは、学校側の配慮と準備が良かった事もあるが、新設のメディアセンターの設備と雰囲気が良かった事も幸いしていると言えよう。

（4）対話テーマについての感想は、余り良くないどちらとも云えないが7名で非常に良い、良い6名に比して多いのが気になるが、その理由はテーマに有るのではなく、そのテーマに対して学生が事前にどのような質問をするか論点は何か言う具体的な質疑内容の詰めがなされていない事が指摘されている。

今回の反省すべき一番の課題である。

（5）グルーピングのやり方については、非常に良い1名、良いと言う人が10名になって特に問題が無い様だが、やはり学生のグルーピングが遅くて事前にテーマの意味する所を十分に理解する事ができなかった事が、対話の不満足の理由一つになっている事に留意すべきである。（4）のテーマ設定の問題と合わせて反省すべき事項である。

（6）オプションツアーの企画は、非常に良い、と良いが12名で大変好評だったのは世話役として安堵した。その理由は、大半が受け入れ先の対応の良さをあげている。特に、JNFLについては、一様に対応の良さが評価されていたのと、余裕深度の地下試験現場の視察が好評の様だった。事前準備に苦勞した大橋氏に対して感謝の意を表す。

（7）学生の学歴に対する問題は気にするほどの事では無いようだ。チャレンジ体験プロ

グラムで既に原子力への理解が有る程度できている事も影響しているという感想も多い。

(8) 再度参加するかとの質問に対して、大半の人が参加を希望している。その理由は新しい学生との対話を楽しみにしていると言う事でこの質問は愚問だったようだ。

(9) 全般に対する感想を到着順に列挙する。

①坪谷隆夫氏

阿部先生のお話の様に学生の就職問題と次世代への知識の継承の重要性、学生に夢をもたせる意味でも核融合研究や新原子力研究の重要性の指摘は筆者の想いと一致するものであった

②斎藤健弥氏

学生が受け身で、せっかくの機会をもっと慾を持ってシニアに食い下がって、議論して欲しいと感じたが無理な話であろうか。(担当グループは3年生)

CG1グループの感想

グループ発表で、「生物に対する放射線の影響はない」との発表には、驚いた。対話では、低レベルの放射線の影響について、環境研のねずみを使った実験や、ホルミシスの話、南部と津軽の大地からの放射線の違いや、再処理工場の放出する放射線の話、放射線のレベルが問題であることも話したが、その結果が、「生物に対する放射線の影響はない」とまとめられたことは、シニアの説明が十分に伝わっていないことである。

また、発表に当たって、発表者と学生メンバーのみの時間を取り、シニアは席をはずした。(学生同士で話しやすくするため)したがって発表原稿は、シニアは見えていない。これが裏目に出たと感じた。どこまで、シニアが介入すべきか考えさせられた。しかし、発表後の質問で、「生物に対する放射線の影響はない」は「間違いである」との指摘があり、これが一番の成果かもしれない。

③荒谷美智氏

青森県の工業都市である八戸の工業大学でこのようなシニアとの対話集会が開かれたことは大変意深い。後になってみるほど、学生にプラスになるのではないかと。私自身にとっても八戸で学ぶ工大生の幾人かと話し合えたことは重要体験。女性もしっかりしていて安心しました。いわゆる女子大生などというイメージと全く違った堅実な態度で勉学していることに本当に安堵しました。それに優しい。身体障害のある学生が一人いましたが、懇親会のときなど、とても優しくしてあげていて心うたれました..男子生徒が少しおとなしいように感じました。これは最近の一般的傾向ですが・・・

④小川博巳氏

今後のビジネス社会では、これまで以上に高いコミュニケーション能力が要求される。殊にビジネスがグローバル化する近未来では、その傾向は必至と予想される。明確な発言・論旨の整理・説得力ある話法等々は、一朝一夕には身に付かぬので、学生時代から意識的な鍛錬を開始し、継続する努力が必要だ。例えば、新聞のトップ記事を訓練材料として、これに対する評論・批判・自己主張などを、簡単なメモにまとめる訓練は、時宜を得た話

題を取り上げ・視野を広げ・思考訓練としても大いにお勧めできる..。

これに、語学の勉強が伴えば、鬼に金棒だ。

⑤岩本多實氏

意思表示の補助手段としての、高度なIT技術の習得も大切だが、それ以前に何をアピールするのか、日頃から己の考え・主張を整理することをお勧めしたい。

⑥松永一郎氏

八戸工大における対話会は今回で4度目であり、そのうち昨年を除く3回参加している。参加する学生も原子力チャレンジ体感プログラムによる講習を全員受けてきており、2回に分けて東通の原子力発電所、六ヶ所再処理工場、大間発電所建設現場、むつ市中間貯蔵施設現場を見学してきているとのことであった。

CG2グループは全員3年生であり、生物化学専攻であった。印象としては、学生が非常に熱心で素直ではあるが口が重く、一部の学生を別として発言が少なかったことが気になった。このような対話には日ごろから慣れていないせいか、自分たちから積極的に話してくるという事はあまりしないのだろう。対話のテーマが「化学技術と原子力」「原子力産業への就職」「女性技術者と原子力」と具体性を欠いていたので、その場で質問しにくかったのかもしれない。他大学でやっているように、事前に参加者からシニアに対する質問を提出してもらっておくのがよいだろう。景気の悪化に伴い、就職状況が急速にわるくなり、就職について聞きたい気持ちは分からないではないが、最終的には総合的な本人の能力を高めるしかないという平凡な話をした。

なお、いずれ就職活動で面接試験があるだろうが、その時のトレーニングとしての意味合いもシニアとの対話会にはあるのではないかという気がした。なお、今回対話会が実施されたメディアセンターは昨秋完成したばかりのものということであった

⑦山田信行氏

SNWの学生との対話集会には初めて参加させていただき、たいへん勉強になりました。ただ、対話内容については自分の至らなさも含めて不本意な点もありましたが、今後生かされるものと期待しています。

⑧橋本哲夫氏

対話集会でも何の会でも終わったあとに楽しかったとの印象が残ることが大切である。特に、年代の違った世代間の対話ではどちらかと言えば、年長者のグループがイニシャチブを取りがちであり、若い人のグループは何も得るものがなしに終わることも考えられる。時間の無駄使いにならないように、プログラムすることが重要となるだろう。

⑨川合将義氏

今回は、これまでの対話の主テーマとなった原子力の技術、安全性、倫理でなく、原子力業界での技術の活用とか、原子力業界での女性技術者のことを代表とされる原子力の労務環境が問われました。こうしたテーマなら、就職先としての疑問も多かろうにと思って、丁々発止のやりとりを期待したのですが。結局、シニアからの発言が多く、もっと食い

下がって欲しかったなという思いが残りました。特に、遠慮がちな東北の人には、もう少し時間があるのかも知れません。それだけに（シニアに直接出さなくても良いから）質問の事前アンケートとグループメンバーでの議論といった準備が欲しいなと思っています

⑩菅原剛彦氏

伊藤さんのご努力, JNFS さんご高配で有意義な対話とツアーだったことに先ず感謝します。学生さんには気力, 気迫, 体力の面で一層の鍛錬を期待します。その意味でもシニアとの交流は有意義だと思います。結果して愉快で楽しい対話ツアーでした。

⑪岸昭正氏

今回基本講演を行った小川博巳氏のレクチャーは大変分かり易く、使った PPT も話し方も素晴らしかった。学生諸君は既に講義でも、現場見学でも原子力施設について既にある程度学習を済ませていることもあり、小川氏の言わんとする主旨は学生にも十分に伝わったと思われる。

⑫松岡俊司氏

1、対話グループの学生は電気電子系学部 3 年生 6 名で対話テーマに対しそれなりの質問があったが、総じて皆さんおとなしく発言を引き出すために逆にシニアの話になるケースが多かった。シニアにも工夫が必要であるが、学生諸君には遠慮せずに大きな声で質問や自分の考えを述べて欲しかった。

2、学生諸君からの主な質問として、原子力は何故 100%の一定運転を行うのか、発電所のシーケスとは、原子力はCO₂を排出しないが廃棄物など負の対応は、東北は何故エネルギー基地が多いのか、原子力に要求される人材とは、バランス感覚とは、などがあった。

3、工大生には「チャレンジ原子力体験プログラム」があり、これに参加しており原子力に対する一般的な理解と前向きな姿勢は、他に比較し深いのではないかと感じた。全員が地元青森出身とのことであるが、就職先に六ヶ所原燃やITER関連企業を希望(4名)しており、多様な原子力施設を有する地元での活躍が出来るよう祈念したい。

4、空き時間に学生一人から、先輩のこれまでの会社生活の中で一番苦しかったこと、そしてそれにどう対応したか、今それをどう思っているか等の質問があった。それなりに答えたが、考えてみれば学生にとって関心の高いテーマかもしれない。

⑬荒井 利治氏

1. 八戸工大との対話会は今回が4回目で、何時もその運営が統率がとれ整然としているのに感心していたが今回は昨年12月に学内にオープンしたばかりのメディアセンターでの開催で特にその感を深くし、阿部先生をはじめとする先生方のご指導の力を感じた。

2. 対話は統一主テーマ「学生の専攻学科・技術が原子力にどのように活かされるか」と

グループごとのサブテーマでおこなわれたが、どちらに力点が置かれたかは学生の発表を聞く限り主テーマが活発に議論された結果が少ないように感じた。これは B4 の学生は殆ど就職が内定しているし、また B3 の学生も「チャレンジ原子力体感プログラム」で原子力発電所、諸施設、メーカーの工場等を見学していてかなりの知識を持っていたことに起因するかもしれない。

3. 自分が担当した MG1 グループはシニアがユーザーとメーカー出身という好い組み合わせであったが、学生のリーダーの特質（あがりやすく発表が苦手、専門突っ込み型）を見抜けなかったファシリテーター役の私のミスで十分な成果が出なかった恨みが有り反省している。

学生の真面目で、素朴な性格は都会との比較で際立っていたが、その反面自己の主張をまとめて相手に訴える力がやや弱いようにも思われた。これはある程度教育、訓練（学生によるとグループ討議などが教科にある由）と、社会に出てからの OJT で身につくのであまり心配しなくても好いかもしい。

● 感想まとめと世話役（伊藤）の感想

- ①大学側[阿部先生、富田書記を始とする関係者]の事前の準備等が行き届いていた事が今回の成功の一要因であったと言えよう。これはこれまで3回の経験が活かされた成果であると考え。
- ②ただ、大きな反省事項として、対話テーマに対する事前の準備不足から参加学生にその趣旨が徹底できなかった事である。次回にはこの反省を生かして、事前に学生に対話の主旨とテーマを徹底して置く事を実行するようにして欲しい。
- ③会の運営は、大学側のお力添えと幹事学生の手で無事に行われた。特に、えんぶり祭りの初日と重なった中で、懇親会場の設定等難儀をお掛けしたことに謝意を表す。
- ④対話方式にF T方式採用はしなかったがこの事が対話が今一つ盛り上がらなかった要因では無く②項に述べた事前での趣旨徹底不足が要因であると思う。
- ⑤オプションツアーの企画は参加した皆様に好評だったのは世話役としては嬉しい事であるが、その準備やアレンジの苦労は相当なもので今後もやる事を単純に推奨出来ない。
- ⑥最後に、至らぬ世話役の無理なお願ひに対応してくれた、大学側お関係者・学生幹事そして参加シニアの皆さまのご協力に感謝します。以上